

“Women and Wish” フォーラム3 男女共同参画に向けた研究者と大学のダイアローグ



3月10日（金）、国際科学イノベーション棟会議室 5a・5bにて“Women and Wish” フォーラム第3回「男女共同参画に向けた研究者と大学のダイアローグ」を開催しました。

はじめに、今村 博臣 広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査の司会進行で、山極 壽一 総長より開会の挨拶がありました。「みなさんのご意見を聞いて京都大学の将来計画に活かしたいと思っています。女性研究者、女子学生、女性職員が増えるということがいったい社会、京都大学にとってどういう大きな意味があるのかということと一緒に考え、それに向けての取り組みを一緒に考えていきたいと思っています。ぜひ今日はいろんな意見をお聞かせください。」と述べました。

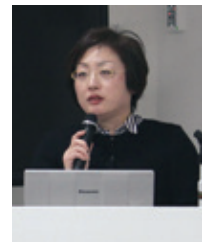
続いて、男女共同参画推進センター長の稲葉 カヨ 理事・副学長より、「2006年に女性研究者支援センターが発足した当時から、みんなの意識がそれなりに醸成してきているということは言えると思います。私の経験も踏まえてお話することがあればと思います。今日は楽しみにしております。」と挨拶がありました。

次に、病児保育事業ワーキンググループ足立 壮一 主査、育児・介護支援事業ワーキンググループ小西 由紀 子主査、広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ

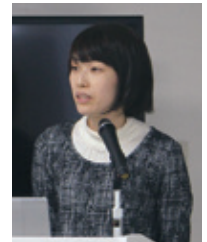


今村 博臣主査、就労支援事業ワーキンググループ佐藤 亨主査に代わり伊藤 公雄男女共同参画推進本部支援室長より、各事業の紹介がありました。

次に、医学部付属病院総務課企画・法規掛の北浦 和子氏より、「京大病院の取り組みについて」と題し、講演がありました。病院の第三期中期計画に基づく病院の取り組みとして、女性医師へのヒアリングをもとに「院内保育所きらら」、「病児保育室こもも」の利便性を改善してきたことや、勤務時間に制約ある医師の仕事と家庭の両立を支援するため「キャリア支援診療医」の称号を新設したこと、新保育所の構想について説明しました。



次に、センターのサービス利用者を代表して2名の方が講演を行いました。まず、医学部付属病院の中嶋 千紗助教より、自身の産休、育休後の復帰について話がありました。復帰の際の働き方について、医員として週4日勤務、教員として時短勤務、キャリア支援診療医を紹介し、キャリア支援診療医については、時給が低いことがネックになり利用する人が周りにいないと話しました。大学院生は認可保育園入園において順位が低く、夫婦ともに大学院生の場合入園が非常に難しいので、京都大学に待機乳児保育室があるということは大変ありがたく、研究を続けていく上で非常に有用であると語りました。また、病児保育室は必ず必要な施設だと思うが、他の大学病院には設置されていないところもあり、京都大学の様々な施設について学会や講演などで話をすると、「京大はいろいろなオプションがあつていいですね。」「働き方をいろいろ選べていいですね。」などと言われることが多く、このような流れを続け、それが日本中に広がればと語りました。



続いて、理学研究科の渡邊 裕美子助教が待機乳児保育室の利用について話しました。保育室を利用できなかった認可保育園に入るまでの1年間育児休暇を取り、家で育児をする傍ら研究ができるかできないかという状態であったため、利用することができ大変よかったと語りました。また、初めての育児で不安と心配の毎日であったが、保育室で保育士



さんに相談できたことや、子育てに研究にと前向きに取り組んでいる女性研究者の姿が身近にあったことも、非常によかったと話しました。一方で、保育室の利用可能月齢が15カ月末までというルールに基づき、9月に異動で来られた方が12月末に退室になったことを挙げ、9月に始めた仕事を1月には休まなければいけないということに、もう少し柔軟な対応ができないものかと語りました。また、修士学生が「保育料が高すぎて利用できない」と言っていたことを受け、潜在的な利用できない原因があるかもしれないと述べました。そして、職場に育児中の女性教員がいないため、センターが育児中の研究者がつながりを持てる場所になってくれればと希望を述べました。

その後休憩をはさみ、女性教員懇話会より「アンケート結果について：各部局における子育て・介護の支援施設、制度等の現状や要望と懇話会からの提案」の題で発表があり、前半部分を医学研究科の木下彩栄教授が担当しました。京都大学を訪れた先生から搾乳設備について問い合わせがあった際、どこにあるのかわからなかったという経験から、女性教員懇話会で働く環境や設備についてのアンケートを実施したと語り、「どこの部局にも授乳、搾乳のできる設備が必要ではないか」「搾乳設備がなくトイレで搾乳しました」「子供を連れて学会、フィールドワークに行けないか」「会議がなかなか17時に終わらない」など様々な意見を紹介しました。また、助産専門の先生より、母乳育児をしながら仕事をする場合は搾乳スペースが必要で、そうでなければ乳腺炎などのリスクが高まると聞いたことを受け、京大の中の育児用設備について実際に聞き取り調査を行ったと語りました。その結果、女子学生用の休養室はあっても育児用のスペースは整っていないところが多く、育児用の設備については情報を把握していないところが多かったと述べました。

後半はアジア・アフリカ地域研究研究科の平野 美佐准教授が担当し、ASAFASでの取り組みとして2015年に男女共同参画委員会が発足し、子育て介護フィールドワーカワーキンググループで2年間活動してきたことを語りました。おむつ替えシートの設置、研究会等で子供を預ける際の託児費用の支援、ホームページの拡充、女性交流室を整備し子育て交流室を設置したことを紹介し、子育て交流室では、搾乳、授乳、ミルク作りができ、おもちゃもあって少しは仕事ができると説明しました。これらができた背景には、山極総長の「WINDOW 構想」、稲葉理事の「男女共同参画推進アクションプラン」があり、上からと下からの声がうまく循環してできたのではと語りました。続いて、他大学の取り組み例として学内保育園や学



童保育を紹介し、京大にも学内保育園ができればと述べました。最後に懇話会からの提案として、授乳、搾乳施設の整備や育児に関する設備の情報を載せた校内マップの作成、新築、改築の際に女性教職員、院生の意見も取り入れること、子育てに有用な情報が共有できるプラットフォームの構築などを挙げ、発表を終了しました。

その後、ディスカッションに入り、山極総長より「現状の問題点があり、これからの指針を作るのに大変役立ちます。」と言葉がありました。続けて、会議



を17時までにするのは部局長会議でも再三言っており、それが徹底していないことに関しては、積極的に部局の問題として言っていただきたいと述べました。設備に関しても、まず現場でどういう形でできるか考えて部局で取り組み、その上でできないことは本部でなんとかしていくと話し、問題解決のためにはネットワークを作ることも大切で、男性教員を巻き込んで組織を作るということも重要だと語りました。続いて、稲葉理事は、教員と事務が情報を共有できていないことがあるため、本部として各事務局に対して女性が使えものはどこにあるかという情報を流してもらうことはできると述べました。学童保育については聞き取りを行った際、どうやって連れてくるのかなどの理由から皆が必要ないと答えた経緯があり、学内保育所は場所の確保が最大の問題とした上、他大学では保育料が高いため待機の間は預けるが、認可が下りれば出て行ってしまう現状があるとし、現在の待機乳児保育室やおむかえ保育の運用になっていることを説明しました。その後、参加者も交え育児用設備や職場環境について意見交換をし、問題点の共有と対処法を議論しました。

閉会の挨拶では伊藤支援室長が、育児用設備のマップ作りやASAFASの例の情報共有ができるのではと述べ、総長へ男女共同参画の委員会を各部局に作っていただきたいとお願いし、フォーラムを終了しました。



ベビーシッター利用育児支援

京都大学男女共同参画推進本部では、本学における教職員の仕事と子育ての両立支援を目的として、「ベビーシッター育児支援割引券」を発行して、ベビーシッター事業者が提供するサービスを利用した場合に、その利用

料金の一部を助成しています。対象事業は以下の2つです。詳細、ご利用については、センターのホームページをご覧ください。

対象事業	①ベビーシッター派遣事業	②ベビーシッター派遣事業（多胎児分）
利用対象者	配偶者が就労している、もしくは配偶者の病気入院等により、サービスを使わなければ就労することが困難な本学教職員	義務教育就学前の双生児等多胎児を持つ本学教職員
対象児童年齢等	0歳～小学校3年生、その他健全育成上の世話を必要とする小学校6年生までの児童	義務教育就学前の児童（多胎児以外の児童を含む）
割引金額	1日につき1家庭2,200円（2,200円以上で利用可）	1日につき1家庭9,000円（2,200円以上で利用可） 義務教育就学前の多胎児が3人以上の場合は、18,000円（2,200円以上で利用可）
割引券の利用可能枚数	1日1枚、1月24枚、1年280枚まで	1日1枚、1年2枚まで

ILAS セミナー「ジェンダーと科学」開講

平成29年度のILASセミナー「ジェンダーと科学」が開講しました。1回生を対象に、講師のレクチャーおよび討論を通じて、ジェンダーについての基礎知識や考え

方を身につけます。自然科学とともに、社会科学・人文科学を含む学際的な視点から、ジェンダー問題について多面的に考察を加えます。講師3名で講義を行います。

「ジェンダーと科学」講師・テーマ一覧

講 師	テ ー マ
竹内 里欧 (教育学研究科 准教授)	ILAS セミナーの目的と内容について 討論とワーク・ショップ
栗屋 智就 (医学研究科 特定助教)	ヒトの発生・発達から考えるジェンダーと性差
山内 淳 (生態学研究センター 教授)	性の進化について



出前講義

3月13日（月）京都府立洛北高等学校にて、稲葉理事・副学長が「『免疫』味方？それとも敵？」の題で特

別講義を行いました。



連載：研究者になる！－第61回－

人との出会いと研究

医学部附属病院・准教授 池田 華子

私は、“困っている人を助けたい”という純粋な気持ちで、医師になるべく、医学部に入学しました。2回生のクラブの夏合宿で、当時6回生の先輩から、研究室で楽しく実験をしている話を聞いたのが、研究に興味を持ったきっかけです。当時薬理学教室（成宮周教授）の准教授をされていた垣塚彰先生（現在生命科学研究科教授）は、学生の私にもわかりやすくお話下さり、研究の楽しさを語ってくださいました。“とりあえずやってみたら”と言われ、大学院生のお仕事をお手伝いさせていただくことになりました。当時は、分子生物学で学んでいたようなDNAシーケンスやプラスミド構築、cDNAスクリーニングなどを、行うこと自体が楽しく、実験に夢中でした。その後、神経変性疾患の発症メカニズムの研究を始めることになりました。培養細胞を用いた実験をして少したったころ、蛍光顕微鏡で観察中、とても面白い現象を見つけました。細胞の中に蛍光の塊があって、その細胞では細胞が死にかかっているのです。興奮して、垣塚先生にお伝えしたことを覚えています。その後、1年ほどは本業も忘れて実験をし、論文としてまとめていただくことができました。進路を決める段になり、基礎（研究者）の道を選ぶか、臨床（医師）の道を選ぶか、少し迷った時期もありましたが、自分には研究者として多くの患者さんを助けられるほどに大成できる能力が無いこと、臨床医であれば目の前の患者さんを助けられる可能性があること、そして何より、人（患者さん）とコミュニケーションを取りたい、と思ったことから、臨床医（眼科医）の道を選びました。

眼科医になって数年、患者さんの喜びを共有できる日々、充実して楽しい毎日でした。臨床系では外病院で2-3年研修をしてから大学院に戻って学位を取ることが多いので、深い考えもなく、当時大学におられた高橋政代先生に相談に行きました。すると、理化学研究所（神戸）の故笹井芳樹先生の研究室でES細胞を用いた網膜の分化誘導の研究に携わる人が必要だということです。今更基礎の研究室でやっていける自信もなく、迷

いはありましたが、笹井先生のお話をお伺いし、数年間、また研究を頑張ってみよう、と理研行きを決断しました。もちろん大変なことも多々ありましたが、実験を始めると、毎日が楽しく、世の中で自分しか知らない現象に遭遇することの醍醐味を再び味わうことになります。

学位論文を仕上げた後は、滋賀県の一般病院で眼科医として忙しい日々を送っていました。当時の眼科教授から、大学に戻って基礎的研究を立て直してほしい、また、若い女性医師にとってのロールモデルとなってほしい、とお声かけいただき、ここでもまた散々迷いましたが、教室への奉公のつもりで大学に戻ることにしました。日常診察の中で、治せない眼疾患を何とかしたい、という思いを持っていましたので、神経保護の研究に取り組むことにしました。子供を育てながら、診察をしながら、学生教育をも行いながら、の研究は、正直、時間のやりくりが大変で、なかなか論文としての成果出せず、苦しい日々でした。しかし、京都大学の女性支援制度の研究補助を使わせていただき、また、優秀な大学院生たちが頑張ってくれたおかげで、ようやく最近、形になりつつあります。先日、京都大学のたちばな賞（優秀女性研究者賞）をいただきました。時間の制約がある中で、自分のできる範囲で頑張ってきたことを認めていただけたのは素直にうれしいです。

このように、私がこれまで研究を行ってきた、行っていくことができたのは、人との出会いに恵まれたからだと思います。研究に興味を持たせてくれた先輩、研究の手ほどきを下さり、神経保護研究の種を下さった垣塚先生、理研での研究の機会を下さった笹井先生や眼科の先生方、京大に戻るきっかけを下さった眼科前教授…人とのつながりを大切にすること、チャンスをつかむべくアンテナを張り巡らしておくことは、研究のみならず人生の様々な岐路で役に立ちます。そして、もう一つ、私がここまでやってこられたのは、家族、先輩・同僚・後輩を始め、多くの方々の理解と協力があったからこそです。日々、感謝の気持ちを忘れずに、少しでも患者さんに還元できるような研究を、これからも続けていきたいと考えています。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>